

中等歴史教育における日中韓の共通歴史教材研究

本間隆造

序章 本研究の目的と概要

本研究の目的は日韓共通歴史教材・日中韓共通歴史教材作成にあたり、どのような経緯で、具体的にどのような議論が行われているのかを明らかにすることである。またこれまで作成された共通歴史教材を教育的視点から考察し、教育の現場でどのように活用できるかを分析するのが本研究の目的である。

本論文は日韓で発行された歴史教育研究会（日本）・歴史教科書研究会（韓国）編著『【日韓歴史共通教材】日韓交流の歴史』（明石書店、2007年）（以下『日韓交流の歴史』）、日中韓3国で発行された日中韓3国共通歴史教材委員会著『未来をひらく歴史—日本・中国・韓国=共同編集 東アジア3国の近現代史』（高文研、2005年）（以下『未来をひらく歴史』）、同じく3国で作成され、同団体によって発行された日中韓3国共同歴史編纂委員会著『新しい東アジアの近現代史（上・下）』（日本評論社、2012年）（以下『新しい東アジアの近現代史』）の3冊を取り上げている。第1章で歴史認識が生じる理由と共通歴史教材の意義、そして日韓・日中韓間でこれまで発行された共通歴史教材の概要について述べ、なぜ上記の3冊を選定したのかについて述べている。そして第2章では作成経緯とその特色、第3章では作成体制と執筆方法、第4章では構成・叙述内容に対する議論内容、第5章では内容構成、第6章では授業実践という5つの視点から比較・分析し、

考察している。

第1章 共通歴史教材の意義

本章・第1節では、国家によって歴史的事象に対する捉え方が異なり、それを歴史教育・歴史教科書で異なって教えているため、歴史認識の差異が生じることを述べた。その解決策の一つとして多角的・多面的に、また客観的に歴史的事象を捉えられる共通歴史教材意義があることを確認した。第2節ではこれまで日本で発行されてきた共通歴史教材8冊の概要を紹介し、その中でもなぜ上記の3冊を選定したのかについて述べてきた。「日中韓2005年版」と「日中韓2012年版」は同じ団体によって作成されているが、日本・中国・韓国の3国で作成している唯一の団体である。また多くの共通歴史教材が近現代史を対象としているように、この団体が作成した2冊の共通歴史教材も近現代史を中心に叙述されている。同団体が作成していることから、その構成内容や叙述内容の変化が読み取りやすいということから、この2冊を選定した。また8冊中6冊が日韓で作成された共通歴史教材だが、その中でも「日韓2007年版」は先史から現代までの全時代を基本的に通史で叙述しているため、他の2冊と比較が可能という観点から選定した。

第2章 共通歴史教材作成の経緯と特色

本章・第1節で『日韓交流の歴史』の、第2節で『未来をひらく歴史』の、第3節

で『未来をひらく歴史』のその後と、『新しい東アジアの近現代史』の作成経緯とその特色について述べた。その上で第4節では3冊それぞれの経緯や特色を踏まえ、比較・分析を行った。『日韓交流の歴史』と『未来をひらく歴史』は歴史教科書問題を契機に作成を開始しているが、1982年の歴史教科書問題か2001年の歴史教科書問題かで違いがみられた。また作成過程の最初の段階で行われている教科書検討、執筆以外での取り組み、構成の検討や原稿の執筆・検討・修正にかかっている年数にも3冊で違いがみられた。各作成過程で決められた執筆方針では3冊で共通点と相違点の両方がみられた。『日韓交流の歴史』と『新しい東アジアの近現代史』の内容は概ねそれぞれの執筆方針通りになっているが、『未来をひらく歴史』は自国中心の歴史叙述の克服ができていないことが確認できた。

第3章 作成体制と執筆方法

本章・第1節で『日韓交流の歴史』の、第2節で『未来をひらく歴史』の作成団体、日本・中国・韓国それぞれのメンバーの考察と執筆方法について、第3節では『新しい東アジアの近現代史』の作成団体を、『未来をひらく歴史』作成時と比較しながら述べ、執筆方法について分析した。第4節では3冊それぞれの作成体制と執筆方法について比較・考察した。作成体制に関して、日本と韓国においては、3冊とも共通して大学の教員や中等社会科教員などが中心に構成されているが、中国は中国社会科学院の研究者を中心に構成されている。中国社会科学院は国家を代表する学術機関であるが、その国家レベルと民間レベルによ

って『未来をひらく歴史』と『新しい東アジアの近現代史』が作成されたことはとても意味のあることである。しかし一方で日本と韓国は上記のメンバー以外にも市民組織の者や学生も参加しており、様々な分野からメンバーを構成しているが、中国のメンバーのほとんどが同じ機関の研究者であるため、様々な考えが生まれにくいのではと筆者は考えた。

執筆方法に関しては、3冊ともに、主執筆者が原稿を作成し、他国と検討を重ねるという方法は同じであったが、『日韓交流の歴史』では、執筆前に教材らしい文章を書く練習が行われていること、日本・韓国からそれぞれ出された各節の教材案を元に執筆しているという特色がみられた。

第4章 構成・叙述内容に対する議論内容の考察

本章では、具体的に執筆者同士でどのような議論が行われているのかについて考察した。『新しい東アジアの近現代史』はまだ発行されて3年であり、情報が少ないという点、また『未来をひらく歴史』と同じ団体が作成している点から、この章では割愛した。第1節では『日韓交流の歴史』での議論内容について、「三・一独立運動」に着目し、分析を行った。日本から出された「三・一独立運動」の教材案と韓国から出された「三・一独立運動」を比較し、その上で『日韓交流の歴史』での「三・一独立運動」とも比較を行い、どのように変化したのか考察を行った。基本的には日韓それぞれで出された教材案で共通する部分を採用していたが、「堤岩里教会虐殺事件」など、その叙述内容に対し認識の差異があ

ったものに関しては軽くふれる程度になっていた。第 2 節では『未来をひらく歴史』での議論内容について、「日清戦争」に着眼し、分析を行った。「日清戦争」は中国が主執筆国であったが、中国の原案を考察し、それに対する日本と韓国から出された意見との考察、『未来をひらく歴史』での変化からどのような議論がされていたのか考察を行った。ここでは、歴史的事象に対する認識は被害国と加害国とで差異が生じることを確認した。それだけでなく、同じ被害国でもその被害的側面が異なることが分かった。同じ被害的側面でも、それぞれが自国を中心に捉えており、他国の被害的側面が薄いのである。

第 5 章 内容構成の分析と考察

本章・第 1 節では構成内容について、第 2 節では叙述内容について、それぞれ 3 冊を分析し、比較・考察を行った。第 1 節の構成内容では、対象者、対象時代、内容の流れ、ページ数、史料数、日韓または日中韓以外の内容の量、本文・史料以外の内容という 7 つ観点から比較した。そこから、『日韓交流の歴史』は資料が多いことや、補足内容が多く、教育現場で使用することを意識して作成しているのが分かった。また『未来をひらく歴史』も史料数が豊富であり、問いがけなどがあることから同じく教育現場に向いている。『新しい東アジアの近現代史』は日中韓以外の世界の情報が多い一方で、本文が多く史料が少ない点や補足内容が少ない点から、中学生や高校生には難しい内容になっていることが分かった。第 2 節の叙述内容では、「日清戦争」の叙述に着目し、本文の流れの比較、いく

つかの叙述内容の比較を行った。そこから、『日韓交流の歴史』は 2 国の関係史を時系列で追え、それぞれの国の背景や意図が読み取れる一方で、他国の内容が少なく、世界での位置付けが難しい内容であった。『未来をひらく歴史』はメインテーマが「日本のアジア侵略」とあるように、中国や韓国の被害的側面が全面に出た叙述になっていた。また 3 国以外の内容も少なく、『日韓交流の歴史』同様、世界での位置付けが難しい内容であった。しかし同じ団体で作成された『新しい東アジアの近現代史』は 3 冊の中で最も客観的に叙述されており、世界情勢に関する情報も多く、大局的に捉えられる内容となっていた。

第 6 章 通歴史教材を活用した授業実践の考察と構想

本章・第 1 節では、共通歴史教材を活用した授業実践について考察を行い、その上で第 2 節では、筆者自身が共通歴史教材を活用した授業を構想した。そして第 3 節では公益財団法人科学技術融合振興財団^④より助成を受けて作成した「歴史認識ゲーム—近隣アジア諸国版—」について紹介している。第 1 節では、『日韓交流の歴史』の大学での実践、『未来をひらく歴史』の日本の高校での実践と韓国の高校での実践について述べた。この 2 冊の共通歴史教材を活用した実践はそれぞれの特徴を活かしたものとなっていた。『新しい東アジアの近現代史』は最近発行された教材であり、授業実践例がほとんどないことから、ここでは割愛している。そこで第 2 節では『新しい東アジアの近現代史』を活用した授業を筆者が構想した。大学の教員養成課程の学

生を対象としたもので、大学生に『新しい東アジアの近現代史』を概説し、中身について討論を行い、授業を考案させるという授業である。将来教師になる学生に、歴史認識の差異があることを教え、その差異を埋めることが重要であることを知って欲しいというのが筆者の考えである。第3節では公益財団法人科学技術融合振興財団から助成を受けて、同社会科教育研究室の鮎川博晃、田島駿己の3人で開発したゲームを紹介している。日本・中国・韓国それぞれの教科書に書かれている叙述内容を比較していき、日中韓で歴史認識の差異があることを教えるために作成したものである。またこのゲームを活用した授業構想についてもこの節では紹介している。

終章 研究の総括と今後の課題

共通歴史教材を作成するにあたり、執筆方法として以下の2点を提案する。1点目は各節や各章で主執筆者を決めるのではなく、2国ないし3国それぞれが原稿を執筆、持ち寄り検討する方法である。しかし中には歴史認識の差異を埋めることが困難な歴史的事象もある。そこで2点目として、日本の認識、中国の認識、韓国の認識と3国の歴史認識を読者に提供することで、生徒自身も考えることができる。このように共通歴史教材から物事を客観的、多角的・多面的に捉える力を養うことができ、将来、国家を形成する一員となった時、国家間の諸問題解決へとつなげることができると筆者は考える。また現存の共通歴史教材を活用する上で教師は、その共通歴史教材を安易に活用するのではなく、吟味が必要である。共通歴史教材の中には史料の豊富さや

他国の内容を詳細に読み取れるものもある。しかし時系列が前後しているものや、叙述内容が客観的でなく、偏った内容のものもある。そのため共通歴史教材を活用する教師は、その共通歴史教材を細部まで吟味し、どんな補足が必要か、どんなことに注意すべきかを考えた上で活用すべきであると筆者は考える。

本研究の課題は以下の5点である。1点目は上記の3冊以外の共通歴史教材の研究である。2点目は外国版の原本に当たれなかったことである。3点目は各国の歴史研究の動向と共通歴史教材の叙述内容を検証することができなかったことである。4点目は本論文の第4章で取り上げた「構成・叙述内容に対する議論の内容」に関してである。いくつかの参考文献には実際に構成・叙述内容を決める際、各国からどのような意見が出されたのかについての情報は掲載されていた。しかし実際にどの国のどの研究とどの国のどの研究がどのようにぶつかったのか、検証することができなかった。これは3点目の各国の研究動向にも関連してくるものである。具体的にどの部分でどのくらい議論をしたのか、史実のすり合わせの実態を明確にする必要もある。5点目は筆者自身が直接執筆者に当たる回数が少なすぎたことである。共通歴史教材を作成している団体はいくつかあり、作成経緯や授業実践、共通歴史教材の内容に関する著書や論文は数多くある。しかし4点目のような、作成の裏側でどのような意見が飛び交っているのかという情報が少ないように筆者は思える。その点を直接執筆者に当たり、調査する必要があったと考える。以上5点が本研究の課題である。

【註】

- (1)シミュレーション&ゲーミングの研究
など、社会や文化の文脈の中で科学技術
の融合を促進させる研究課題に対する助
成事業と、その成果を広く還元する普及
啓発事業を活動の柱としている団体。